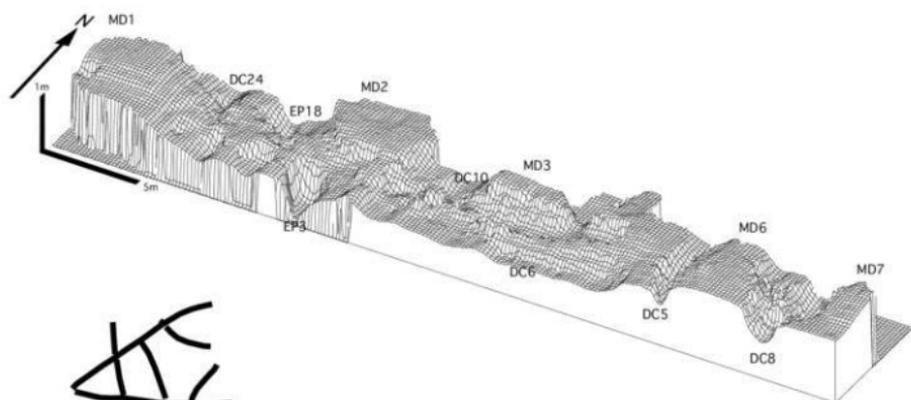


共同住宅建設に伴う

瓜生堂遺跡第 50 次発掘調査報告書



2004.3

財団法人東大阪市文化財協会

例 言

- 1 本書は、東大阪市瓜生堂3丁目83-3,5,6,85-5,6で実施した共同住宅建設に伴う瓜生堂遺跡第50次発掘調査の報告書である。
- 2 調査は日本エスリード株式会社(代表取締役・荒巻杉夫氏)より委託を受け、東大阪市教育委員会の指導に基づき財団法人東大阪市文化財協会が実施した。
- 3 調査にかかる費用は日本エスリード株式会社が負担した。
- 4 現地調査は2002年4月24日から2002年7月3日にかけて実施し、以降2004年3月31日まで遺物整理作業を並行して行った。
- 5 現地調査および本書の作成は別所秀高(財団法人東大阪市文化財協会)が担当した。
- 6 本調査に適用した水準高は東京湾平均潮位、座標は旧測地系の第VI系平面直角座標である。
- 7 本調査および整理作業には日高貴史、大須賀美樹、本田けい子ら補助員が参加した。
- 8 本調査にあたり財団法人東大阪市文化財協会の職員をはじめ、財団法人大阪市文化財協会の大庭重信氏、財団法人大阪府文化財センターの若林邦彦・井上智博両氏からは様々な御教示を得ることができた。また、日本エスリード株式会社および安西工業株式会社からは現地で多大な尽力を得た。これら関係者各位に感謝いたします。

目 次

第1章 はじめに	1
第2章 層序	2
第3章 遺構	7
(1)弥生時代遺構面U	7
(2)弥生時代遺構面L	13
第4章 遺物	17
土器	17
土製品	22
石器	22
木製品	22

第1章 はじめに

本調査地点は東大阪市東大阪市瓜生堂3丁目83-3,5,6,85-5,6に所在する(図1)。日本エスリード株式会社は同地でマンション建設を計画したが、周知の埋蔵文化財包蔵地「瓜生堂遺跡」に含まれていたため東大阪市教育委員会が試掘調査を行ったところ、地表下4m付近から弥生時代中期の遺物包含層が確認された。東大阪市教育委員会と日本エスリード株式会社は埋蔵文化財の取り扱いについて協議し、工事によって破壊されると予想された239m²について発掘調査を実施することになった。これを受けて東大阪市教育委員会の指導のもと財団法人東大阪市文化財協会が発掘調査を実施した。現地調査は2002年4月24日～同7月3日にかけて実施し、以降2004年3月31日まで出土遺物の整理事業を実施した。

瓜生堂遺跡はこれまでに財団法人東大阪市文化財協会をはじめ、瓜生堂遺跡調査会、財団法人大阪府文化財センターなどによって調査が行われてきた。北側に隣接する第42次調査地点では弥生時代中期の方形周溝墓10基が確認され、これらの墓は流路および自然堤防の西への側方移動とともに西側に広がっていったことや、方形周溝墓の基盤層上面には高密度で分布する遺構群があり、これらの遺構を破壊したうえで墓が築造されていたが明らかになった(東大阪市文化財協会1999, 松宮1997)。

調査の方法と進行は東大阪市教育委員会と日本エスリード株式会社との協議にもとづいた。敷地面積約2114m²のうち南半部の東西に長細い239m²を調査対象とし、このうち東、南、西面を鋼矢板で囲って土留め工を施し、北面は法面を設けた露頭状態で掘削をおこなった。また、地表下3.1mは機械掘削、それ以下4.7mまでを人力掘削とした。人力掘削においては狭長な調査地を任意で7地区に区分して西からA～G区と名付け、それぞれの調査区ごとに出土遺物の取り上げを行った(図3)。

文献

松宮昌樹, 1997, 瓜生堂遺跡と周辺遺跡の集落変遷。大阪の弥生遺跡検討会編, 大阪の弥生遺跡1—遺跡検討会の記録, pp.41-47。
松宮昌樹, 1999, 瓜生堂遺跡第44次発掘調査報告。財団法人東大阪市文化財協会

第2章 層序

盛土

層厚約2mで調査地全域に分布する。盛土中には2枚の水田作土層がみられ、その上位を既存建物建設時の盛土が覆い、3回にわたって盛土が施されていることがわかる。下位2層の盛土は周辺の地盤地下による地下水位上昇に対処するために客土され、新たに水田が造られたと推測される。いずれもガラス片やプラスチック製品、ビニール製品が含まれることから、戦後の盛土と考えられる。



図1 瓜生堂遺跡第50次調査地点

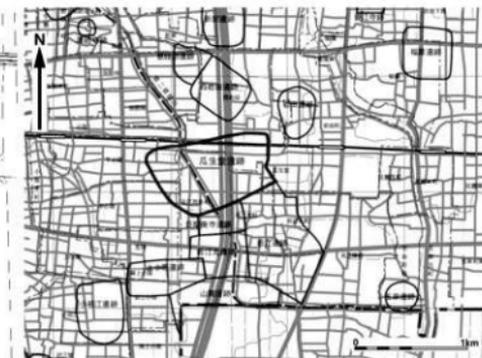


図2 東大阪市中央南部に分布する遺跡

第1層

層厚約50cmで調査地全域に分布する水田作土とその芯土からなる。上部の作土は層厚約15cmで、黒色を呈する砂混じり粘土質シルトからなる。下部の芯土は層厚約35cmで、緑灰色を呈するシルト質砂からなり、イネの根跡が観察される。下層との境界付近や根跡に沿って酸化鉄や酸化マンガンの沈着がみられる。作土面は東側のほうが高く、西側は低い。F, G区では下層の砂を採取したときにできた土砂取り穴が確認できることから、泥がちな地盤を改良して水田を造成したことが伺える。近世の瓦や近現代のレンガ、ピンのかけら、コンクリートブロックの破片

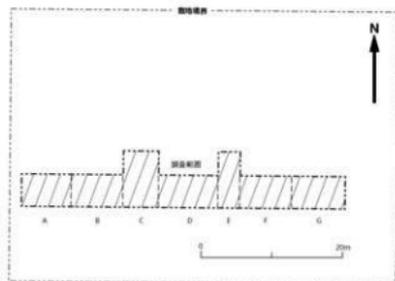


図4 調査地区区割り



図5 機械掘削の様子。背後のマンションは第42次調査地点。

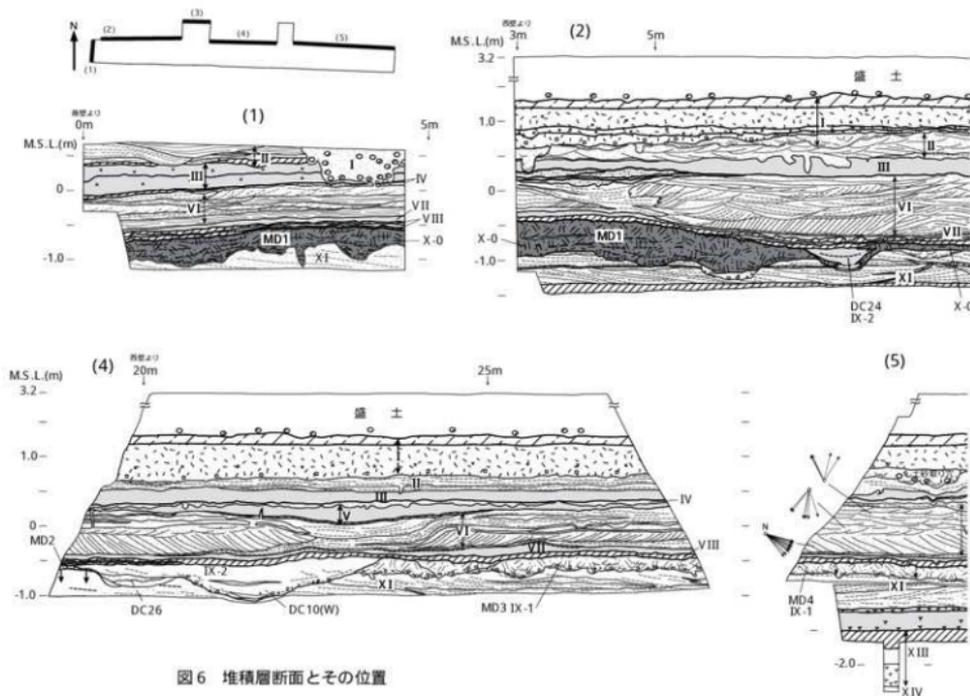


図6 堆積層断面とその位置

などが出土したことから、近代～現代のものと考えられる。

第II層

黄白色～白色を呈し、トラフ型斜交層理～水平層理をなす粗粒砂～細粒砂からなる。層厚約60～10cmで、西側ほど層厚を減じる。下層境界には密度差によって生じた荷重痕が顕著に認められる(図7)。流路縁～自然堤防の堆積環境を示す。出土遺物は認められない。

第III層

灰色～緑灰色を示す無層理の極細粒砂～シルトからなる。層厚約20cmで調査地全域に分布する。後背湿地の堆積環境を示す。出土遺物は認められない。

第IV層

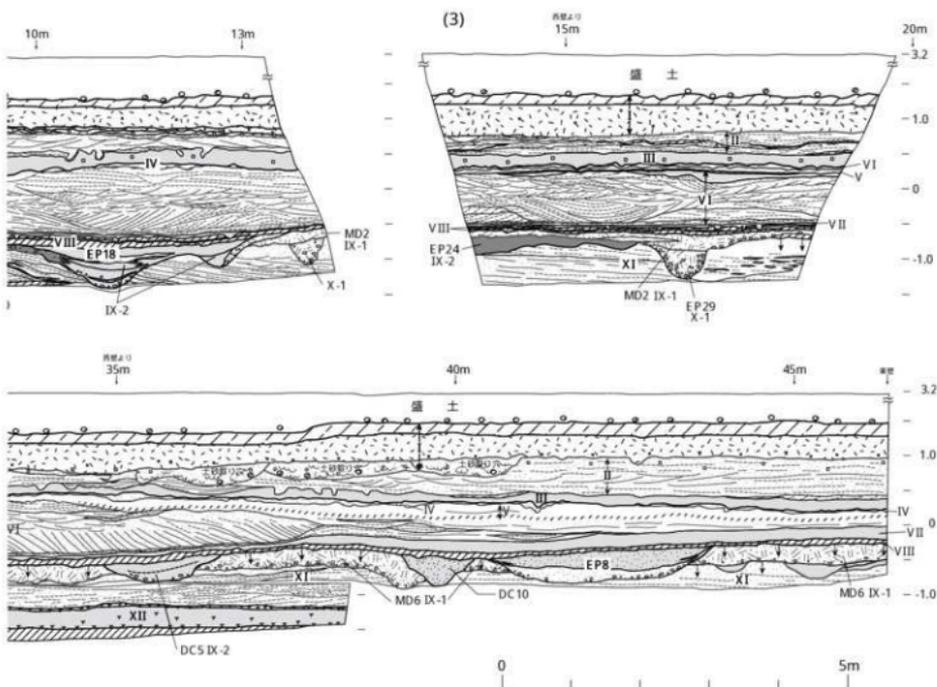
白色を呈する塊状の極粗粒砂～細粒砂からなる。層厚約10cm以下で凹凸が著しく、断裂しつつも調査区全域に分布する。上部にはわずかに古土壌がみられる。第VI層を給源とし、周囲の相対的な低所にかけて流出したものがシート状に分布しているものと解される。陸化後の植生や人間活動によって初生的な堆積構造がかき乱されている。出土遺物は認められない。

第V層

灰色を呈する無層理の極細粒砂～シルトからなる。層厚約20cm以下でC～D区にかけてレンズ状に分布する。後背湿



図7 II層下部にみられた荷重痕。



地の堆積環境を示す。出土遺物は認められない。

第VI層

下半はプレー型斜交層理をなす極粗粒砂～細粒砂からなり、その最前線は逆級化を示す細粒砂～シルトに移行する(図10)。洪水氾濫時に流路から後背湿地の静水域に布状に運搬された土砂からなり、緩やかな凹凸をもつ堆積地形を形成すると同時に、方形周溝墓の周溝を埋めている(図9)。上半はトラフ型斜交層理をなす極粗粒砂～細粒砂からなる(図8)。F区北壁での古流向は下半部が東南東、上半部はおおむね南南西あるいは北であり(図6(5))。洪水氾濫時に比べ減水期にはおおむね90°近く流向が変化していることがわかる。

第VII層

灰色を呈する無層理の粘土質シルトからなる。層厚約20cm以下で、東側に向かって層厚を増す。後背湿地の堆積環境を示す。出土遺物は認められない。

第VIII層

有機物に富み、黒色を呈する無層理の粘土質シルトあるいは細粒砂質シルトからなる。下位の方形周溝墓墳丘部の直上付近では下半部がやや砂がちである。同上半部や周溝付近では未分解の植物遺体を含む粘土質シルト層で、さらに周溝付近では灰色粘土質シルト層を挟んで上下2枚に分かれることがある。閉塞された水深の浅い静水域の堆積環境を示す。本調査地点では土器の破片が僅かに出土しただけで時期は特定できないが、周辺の既調査地では本層に対比される層準で、しばしば弥生時代後期の土器が出土することから、同時期に比定される。

第IX-2層

主として灰色～暗灰色を呈する無層理の粘土質シルトからなり、方形周溝墓の周溝を充填する堆積層である。溝の谷壁斜面上には墳丘から流出した土砂が、下底付近には開削時に生じた多数の偽礫がみられる。溝の谷壁や底には土壌の発達がなく、開削当初から周溝は水没していたことが推測される。供献土器を含む弥生時代中期(IV様式前半)の土器が多数出土した。

第IX-1層

マッシュな砂質泥あるいは泥質砂からなる。MD1を除く他の方形周溝墓墳丘がこれに相当する。周溝を開削したときの排土砂を盛って造られた人為的な堆積層で、それぞれの墳丘の岩質は基盤層の岩質に支配されており、東側に位置する墳丘ほど砂質に富んでいる。下層境界は凹凸が著しく、本層下部付近にはしばしば偽礫がみられることから、単に地表面に土砂を積み上げただけでなく、墳丘造成過程で排土砂と基盤層が混層されていたことがうかがえる。いずれの墳丘にも頂部には土壌形成が認められる。僅かに弥生時代中期(IV様式前半)の土器の破片が出土した。本層上部を弥生時代遺構面Uとした。

第X-0層

黒色を呈し、土壌形成が顕著な砂質泥からなり、東側ほど層厚を減じる。自然堤防を構成する堆積層をなし、より西側に流路があったと考えられる。A区のMD1およびDC24とDC1に挟まれた範囲がこれに相当する。MD1には不連続ながらも水平方向にのびる何枚かの薄層がみられたが、これは西側からの越流によって断続的に堆積作用が繰り返されたことがうかがわせる。また、MD1は人間による地表面の攪拌が顕著であり、偽礫が多数観察される(図12)。後述のとおりMD1には高密度で遺構が分布するが、これは生活面が越流堆積層に覆われるたびにその上面に新たな遺構を作り直す作業が繰り返されたためだと考えられる。多数の弥生時代中期(IV様式前半)の土器が出土したが、ほとんどが破片である。本層中で検出した数枚の遺構面と前述のIX層下面を弥生時代遺構面Iとした。

第X-1層

土坑を充填する泥質砂層からなる。偽礫がみられることから人為的に土坑を埋め戻したものと考えられる。A区北壁にみられた土坑とEP29がこれに相当する。E29からはやや古い弥生時代中期(III様式)の土器が出土していることから、X-0層に先行する可能性がある。

第XI層

トラフ型斜交層理をなす中粒砂～砂礫からなる。本層上部のところでこれと同時に異相をなす泥質砂層およ

図8 F区北壁断面。下部の黒い帯が弥生時代中期末の古土壌で、方形周溝墓の上面に対応する。その上にはプランナー型斜交層理をなす砂層が、さらにその上にはトラフ型斜交層理をなす砂層がみられる。

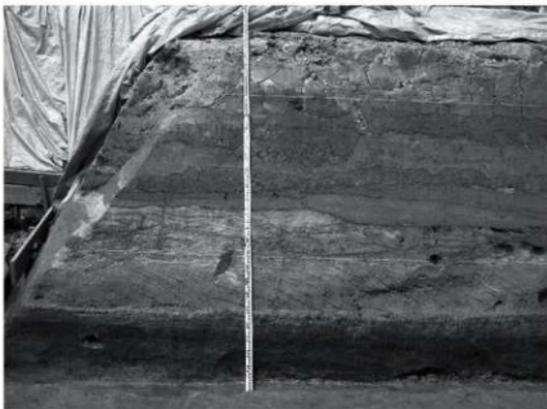


図9 A～C区北壁断面。方形周溝墓の填丘と填丘の間の窪地を分厚い砂層（VI層、矢印）が覆っているようすがわかる。左奥で人がしゃがんでいるところはMD1の頂部。方形周溝墓はさほど浸食されることなく完全に埋没している。



図10 D区北壁断面にみられるプランナー型斜交層理。プランナー型斜交層理を構成する各層理は、写真右側にかけて薄層化・細粒化し、逆級化をなす。





図11 F・G区南壁断面にみられるMD6填丘盛土(左)と,DC5(中)およびDC6(右)を充填する堆積層。



図12 A区西壁断面にみられるMD1填丘の堆積層(暗色部)。水平方向にのびる不連続な薄層がみられる。下部付近には土器片や偽礫が観察される。



図13 A・B区下層の露頭にみられる流路堆積層。写真右側が西で、流路は東に向かって側方移動しているようすがわかる。

び無層理の泥層が分布する。層厚は約80cmを測る。流路堆積相を示し、流路は東に向かって側方移動している(図13)。出土遺物は認められない。

第XII層

黒褐色～黒色を呈し、無層理で有機物に富む亜泥炭層。最上部は亜泥炭と細粒砂～極細粒砂の薄層が互層をなす。閉塞された水深の浅い静水域の堆積環境を示す。出土遺物は認められない。

第XIII層

上部、中部、下部に分別される。上部は黒色を呈し顕著に土壌形成がみられる。中部は白色～灰白色を呈する無層理の粘土質シルトからなる。下部は中部に比べ植物遺体細片を多く含む。

第XIV層

緑灰色～灰色を呈すし、砂質泥と細粒砂の葉層が互層をなす。生痕化石が顕著に認められる。XIIIおよびXIV層は周辺の調査で確認されている縄文時代後期～晩期の干潟堆積相に対比され、前者は干潟後背地の堆積環境、後者は干潟潮間帯の堆積環境を示す。

第3章 遺構

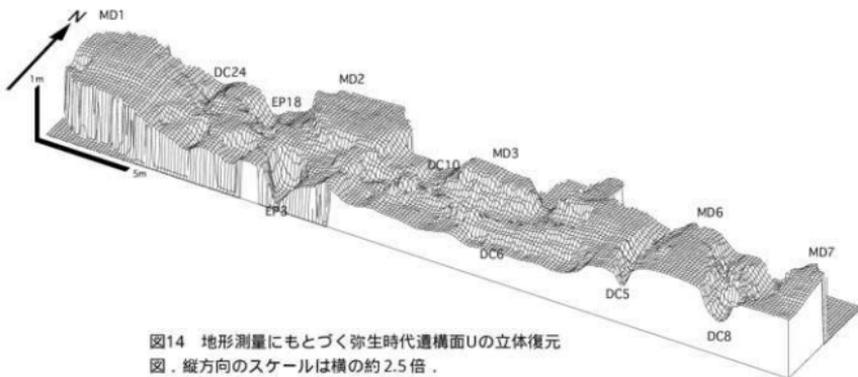
本調査で露頭断面に現れた弥生時代～現代の遺構面計4面のうち、遺構が顕著で遺物が多産した弥生時代中期畿内第IV様式前半期の遺構面2面(弥生時代遺構面Uおよび弥生時代遺構面L)について記録を採った。両遺構面に伴う土器はいずれも弥生時代畿内第IV様式期前半に属し、時期差がみられないが、層序学的には弥生時代遺構面Lのほうが弥生時代遺構面Uに先行する。弥生時代遺構面Uは小規模な墳丘群とその周囲を巡る溝や窪みが、弥生時代遺構面Lは建物跡や溝、土坑が高密度で分布することが特徴である。

(1) 弥生時代遺構面U(図15)

調査区内では計5基の墳丘とその周囲に配された溝および土坑状の窪みを検出し、溝の配置関係からは調査区外にはさらに2基の墳丘が存在しているものと推定される。これらの遺構は方形周溝墓の一種で、周溝の底から墳頂までの比高差は1mにも満たない、簡素な造りの墳丘墓である。このような簡素化された方形周溝墓は調査地周辺に多数見受けられるが(たとえば松宮1997, 曾我1999)、まれに大阪ポンプ場内で検出された2号および14号方形周溝墓のように、墳丘の規模や埋葬された人骨の数が際立っているものもある(瓜生堂遺跡調査会1981)。なお、本調査地点の墳丘には主体部がみられず、調査区外に配されているものと考えられる。

MD1(図17)

A区で検出した墳丘で、最大幅4.5m以上、DC24との比高差は約65cmを測る。もともとの自然堤防状の高まりを利用し、部分的に開削して墳丘を構築したと考えられる。



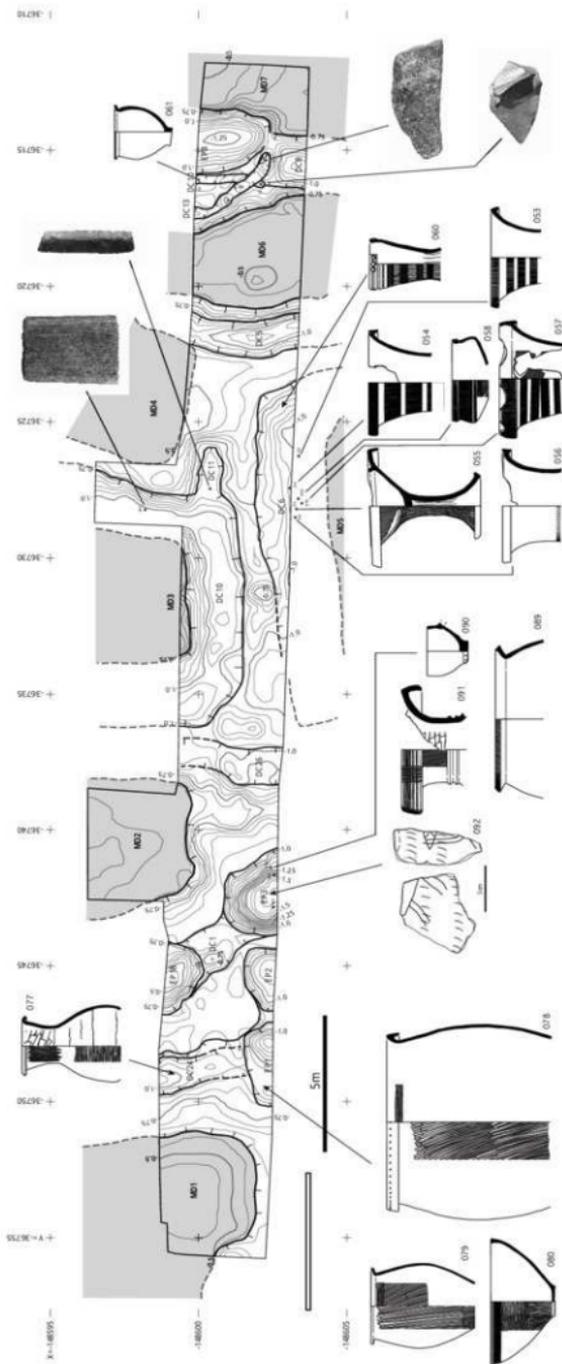


図 15 弥生時代遺構面 U の遺構分布と主な遺物の出土地点

MD1に付随する溝および土坑群（B区，図17）

DC24はMD1の西側に位置する南北方向の溝でMD1を画する役割をもつと考えられる。幅1.5m、深さ最大で25cmを測る。弥生土器の破片がみられたほか、底部が欠損した壺（077）が出土した。

EP1はDC24の南側延長上で検出した土坑である。不定形で土坑内部に2つの窪みをもつ。最大幅3m、深さ約40cmを測る。多数の弥生土器の破片がみられたほか、大型の甕（078）鉢（080）などが出土した。

EP2はEP1の東側で検出した土坑で、最大幅2.2m、深さ最大で30cmを測る。僅かに弥生土器の破片が出土した。

MD2

C区で検出した墳丘で、4m×3.7m以上を測る。自然堤防状の高まりを利用しているが、さらにその上に厚さ約10cmの盛土がみられる。

MD2に付随する溝および土坑群（B, C, D区，図17）

EP18とEP3、それらを繋げるDC1によってMD2の西側を、DC26によって東側を画する。

EP18は幅1.7m以上、深さ45cmの不定形土坑である。僅かに弥生土器の破片が出土した。

EP3は2.6×2.0m以上、深さ80cm以上の楕円形土坑である。湧水による壁面の崩壊があり、底まで完掘していない。他の土坑に比べ深く湧水層にまで達していることから、井戸として機能していた可能性がある。弥生土器の破片がみられたほか、胴部を欠いた広口壺（091）把手付鉢（090）甕（086, 089）鹿が描かれた絵画土器の破片（092）用途不明の木製品（W03）サクラの丸太（W01）などが出土した。

DC1はEP18とEP3を繋ぐ、幅1.5m、深さ15cmの溝である。弥生土器の破片が僅かにみられたほか、礫器（G05）が出土した。

DC26（図18）

D区で検出した屈曲しながら南北方向に延びる溝である。幅最大1.4m、深さ15cmを測る。僅かに弥生土器の破片が出土した。

MD3（図18）

D区で検出した墳丘で、幅4.2m以上、盛土の厚さ約25cm、DC1との比高差は約50cmを測る。僅かながら墳丘の南縁を調査区内で記録することができた。

MD3に付随するDC10（図20）

MD3の少なくとも西、南、東の3側面を画している溝で、幅1.9m、深さ45cmを測る。ごく僅かに弥生土器の破片とともに、木棺の木口板として利用可能な板状木製品（W04）が出土した。

MD4

F区北壁で盛土を確認したが調査区内へ平面的な拡がりはみられず、墳丘のほとんどは調査区外に配されている。盛土の厚さは15～20cmを測る。

MD3に付随する溝（図20）

西側の区画溝はMD3とDC10を共有していると考えられる。DC10の南東隅から東へ約1.7m突き出たDC11はMD4の南側を画する溝の一部と考えられる。E区で検出した。幅約70cm、深さ10cmを測るが、周囲の等高線の分布からみて、遺構範囲をより広く捉えることも可能である。先端部が欠損した石椁が出土した。

DC6

墳丘（MD5）の周囲を巡る溝と考えられ、その北側の溝の一部をD～F区南端で検出した。幅約1.2m以上、深さ35cm以上を測る。多数の弥生土器の破片がみられたほか、細頸壺（060）や口縁の一部を欠き胴部以下を欠損した広口壺（053, 054, 056, 057）底部を欠損した鉢もしくは台付鉢（058）杯の一部を欠いた高杯（055）がまとまった状態で出土した。

MD6（図22, 23）

F, G区で検出した最大幅3.6m×3.6m以上の南北方向に長い墳丘で、EP8との比高差は約75cmを測る。盛土の厚さは25～30cmで、やや砂がちな盛土である。多数の弥生土器の破片がみられたほか、高杯の脚（127）

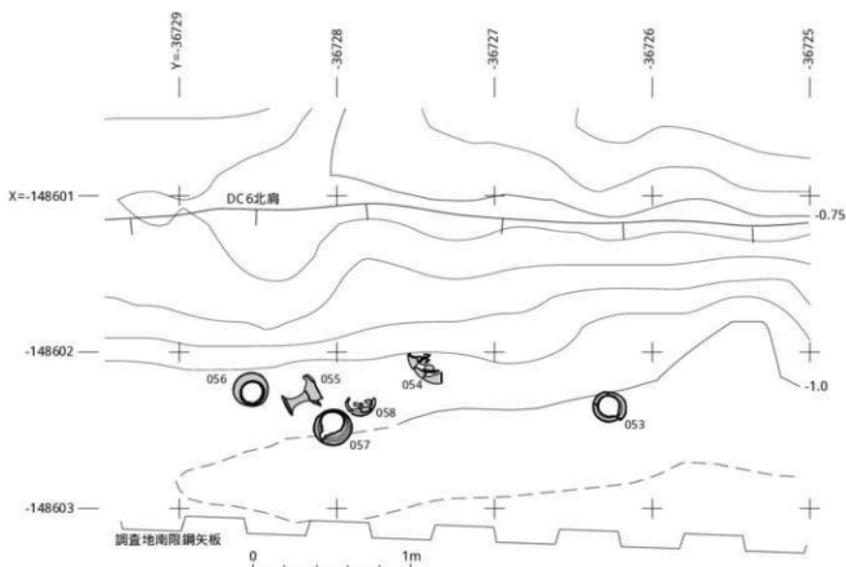


図16 DC6内供献土器出土状況、土器の横の数値は土器番号。

や広口壺(126)、球状の土製品(D02)が出土した。これらの遺物は墳丘構築時に下位の弥生時代遺構面Lに伴う遺物包含層や遺構からリワークしたものと判断される。

MD6に付随する溝および土坑

DC5はMD6の西側を画する溝で幅1.3m、深さ25cmを測る(図29)。僅かに弥生土器の破片が出土した。

DC8とEP8は南北に隣接し、MD6の東側を画し、かつMD7の西側を画する土坑群と共有している(図30)。DC8は幅1.8m×1.2m以上、深さ40cmの矩形形状土坑である。弥生土器の破片が出土した。

EP8は幅2.2m×2.4m以上、深さ40～50cmの楕円形状土坑である(図30)。ごく僅かに弥生土器の破片が出土した。泥質堆積物で充填されているが、隣接するMD6やMD8の墳丘盛土が浸食され溝内に流入した砂質堆積物と指交する。これは他の墳丘とは異なり、砂質基盤層の上にそこから採取した砂がちな堆積物を盛って墳丘を造成したことに起因する。

MD6構築後に墳丘上に形成された溝

MD6北東部に形成された溝で、DC10がDC13よりも先行する。DC10は幅25cm、深さ約15cmを測り、南北方向に延びる。小型の甕(061)やサヌカイトの原礫(S07)が出土した。

DC13は幅28cm、深さ約15cmを測り、北西—南東方向に僅かに屈曲しながら延びる(図30)。ごく僅かな弥生土器の破片と長さ26cmの礫が出土した。

MD7

G区で検出した最大幅2.5m×3.6m以上の南北方向に長い墳丘で、EP8との比高差は約80cmを測る。盛土の厚さは約25cmでMD6と同様に、砂がちな盛土である。弥生土器の破片や打製石槍(S15)、石核(S14)が出土した。

以上の墳丘とその周囲の遺構群の配置からは、各墳丘ごとの区画は意識され、密集するが、整然と配置された方形周溝墓群ではない。また、MD1やMD2のようにももとの自然堤防状の微高地をうまく利用して造ら

図17 A・B区における弥生時代遺構面Uの遺構。一番奥の高まりはMD1。



図18 D区で検出した弥生時代遺構面Uの遺構。写真上中央はMD3とその周溝(DC26)。





図19 F・G区のMD6下位の弥生時代遺構面Lで検出した柱穴群。点線を付した溝はMD6に伴う周溝DC5。



図20 DC10で出土した木口板木棺



図21 C区EP29内遺物出土状況

図22 F・G区のMD6下位の弥生時代遺構面Lで検出した柱穴群、点線を付した溝はMD6に伴う周溝DC5。



図23 F・G区のMD6下位の弥生時代遺構面Lで検出した柱穴群、点線を付した溝はMD6に伴う周溝DC5。



れた墳丘がみられることから、最小限の労力で墳丘が構築されていることがうかがえる。いっぽう、これらの墳丘は墳頂から斜面にかけての古土壌が顕著であるが、周溝の底まで古土壌が連続することはない。周溝は泥質堆積物で充填されていることから、築造当初から周辺の地下水位が高く、周溝内は常に滞水状態であったことがわかる。

なお、弥生時代遺構面Uの遺構群については、地表面の起伏を可視化するために、現地の測量データから3次元立体復元図を作成した(図14)。

(2) 弥生時代遺構面L

建物跡を構成する柱穴群、土坑、溝などからなる。地点によって遺構群の密度に違いがある。上面に形成された遺構のうち、墳丘間を境するためにとくに深い深度で掘削されたAB区境界付近のDC24およびEP1、BC区境界付近のDC1、EP18およびEP3、G区中央付近のEP8およびDC8の直下は掘削時に破壊され、すでに失われている。

A、B区で検出した住居跡を構成する遺構群とその後形成された溝群(図25、26、27)

A区では竪穴住居に付随すると考えられる弧状の壁溝や柱穴、土坑や直線状の溝が高密度で検出された。これらの遺構は同一面ではなく、X-0層形成時の断続的な積み重ねの過程でできた複数の地表面に形成された

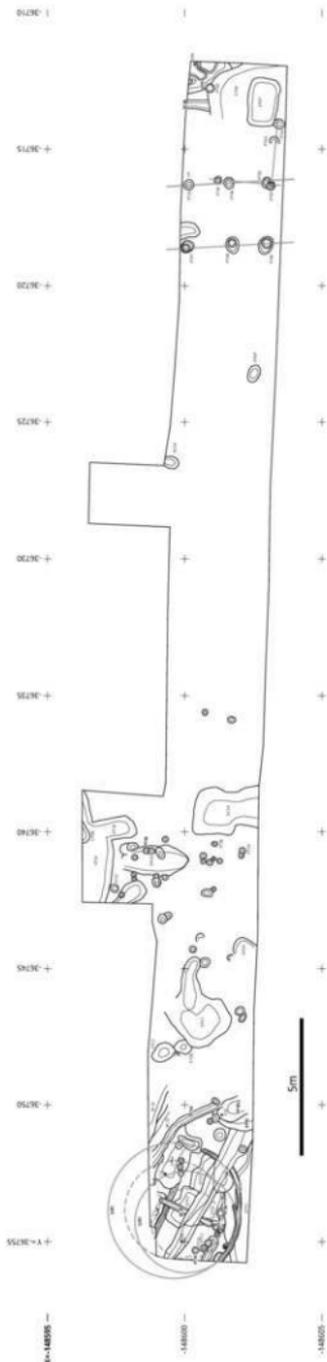


図24 弥生時代遺構面L遺構分布図

ものである。つまり、西側の流路から氾濫時に供給された土砂が堆積してきた自然堤防状の高まりに形成された遺構群である。

これらの遺構の切り合い関係から最も古いと考えられる遺構はEP12で、比較的規模が大きく、さらに南側へ広がっている。EP12の次に形成される遺構は、壁溝DC17とその内側に分布する柱穴群からなる住居跡である。DC17は見かけ上途中で分岐することから、建て替えが行われたと考えられる(住居1および住居2)。推定で住居1は直径約5m、住居2は同3.6mの円形の平面形態をなし、それぞれその内側に同心円上に配された柱穴群が認められる。さらにこれらの遺構を切って、西南西—東北東方向に延びる数条の溝がみられる。

G区で検出した建物跡およびその他の遺構群(図28, 29)

G区では掘立柱建物跡や規模の大きい土坑、溝、柱穴などが検出された。柱穴PT7,8,9とPT20,6,2は南北方向に平行して並び、同じ掘立柱建物の柱穴を構成していると考えられる(建物1)。また、PT2を切るPT1と、直交するPT10—PT1およびPT5—PT10の柱穴の並びがみられ、これらも建物を構成する柱穴の可能性が高い(建物2)。さらにこれら建物跡の東側には、1.4×0.8mの長方形の土坑(EP7)これに先行する規模の大きいEP10、DC9やEP10などの遺構群が分布する。EP10からは比較的多数の土器が出土したが、他の遺構からは弥生土器の破片が僅かに出土したのみである。

文献

- 瓜生堂遺跡調査会 1981 瓜生堂遺跡 III。
- 松宮昌樹 1997 瓜生堂遺跡第42次発掘調査概要。東大阪市埋蔵文化財発掘調査概要—1995年度調査(1)—, 財団法人東大阪市文化財協会, 23-86。
- 曾我恭子 1999 弥生時代の調査成果。都市計画道大阪鶴堂山線建設に伴う瓜生堂遺跡第45次発掘調査概要報告, 財団法人東大阪市文化財協会, 13-88。

図25 A・B区の弥生時代遺構面Lで
検出した高密度で分布する遺構群。
北西より撮影。



図26 A・B区の弥生時代遺構面Lで
検出した高密度で分布する遺構群。
南東より撮影。



図27 B・C・D区の弥生時代遺構面Lで
検出した遺構群。破線は同Uに伴う
遺構。





図28 G区の弥生時代遺構面Lで
検出した遺構群。

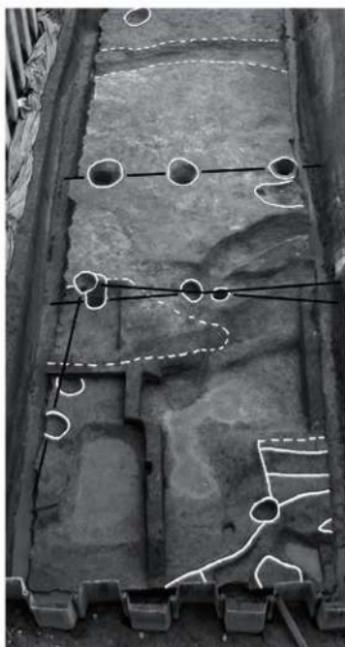


図29 F・G区の弥生時代遺構面Lで検出した柱穴群。柱穴の配列からは建物が2棟あることがうかがえる。



図30 G区の弥生時代遺構面UおよびLで検出した遺構群。

第4章 遺物

本調査地点では第1層上部の水田作土から近現代の瓦片が、VIII層から土器の細片が僅かに出土したほか、弥生時代遺構面Uで検出した周溝や土坑を充填する堆積層および各墳丘の盛土、弥生時代遺構面Lで検出した遺構を充填する堆積層、氾濫堆積物が累重する堆積層（IX-0層）から多数の弥生時代中期の土器や土製品、石器などが出土した。このうち、弥生時代遺構面Uの遺構から出土した遺物については、各々の遺構名称を付して取り上げたが、各々の遺構を充填する堆積層最上部付近は「IX-2層」と総称した。また、方形周溝墓のうち墳丘が盛土で造られているものについては前章で「IX-1層」と総称しているが、遺物の出土地点はすべて特定しているので、それぞれの方形周溝墓の番号を付している。遺構検出面と層準の関係は図31に示す。出土土器の記載一覧および写真については附録のCDに収録した。

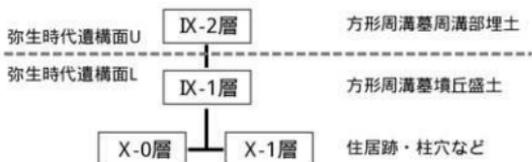


図31 遺構検出面と層準の関係。

土器

弥生時代遺構面Uに伴うIX-2層および同Lに伴うIX-1層、X-0層、X-1層から出土した土器は、弥生時代畿内第IV様式前半に併行するものがほとんどで、まれにやや古い要素をもつものがみられる。また、遺構や層準によって土器片の大きさにバラツキがみられることを特徴として指摘できる。このことを視覚的に表現するために主要な遺構および層準から出土した土器について、粒度分析を試みた。

対象とした土器片すべてをデジタルカメラで撮影した後、画像処理プログラムNIH Image 1.63に取り込んで土器片個々の面積を求めた。次に個々の土器を円形と見なし、先に求めた面積からその直径を求めた。さらにWentworthの粒径区分にしたがって直径をφ係数に変換し、0.5φごとの出現頻度分布を描いた。同時に、平均粒径、淘汰度、最頻値を求めた。以上の結果を図32および33に示す。

出現頻度分布は単峰性を示すもの（DC1, 8, EP8, IX2, MD2I, X1, MD6IX1, MD7IX1, EP17）著しい主峰とその細粒部に小さな峰をもつ双峰性のもの（DC6, EP1, X0, DC22, EP10, EP15, 以下「細粒部双峰性」）粗粒部に小さな峰をもつ双峰性のもの（EP3, 以下「粗粒部双峰性」）がみられる。平均粒径はEP17がもっとも大きく、EP3がもっとも小さい。また、DC1を除いて淘汰はよくない。

弥生時代遺構面LのX-0層に着目すると、平均粒径が細かいうえ淘汰が非常に悪いことがわかる。これは先述のようにMD1付近では生活面が越流堆積層に被われるたびにその上面に新たな遺構を作り直す作業が繰り返されており、この作業の繰り返しによって地下に埋まっている土器がたびたび破壊されてきたためと考えられる。X-0層中の遺構であるDC22とEP15についても同様の解釈ができよう。EP10についても周辺で遺構が高密度で分布することから、より新しい遺構が作られるたびに地下の土器が破壊されたと解釈できる。さらに、これらの遺構の直上にある弥生時代遺構面UのEP1はやはり細粒部双峰性を示し、EP8は平均粒径が小さいことから、下位の遺構や遺物の影響を受けていると考えられる。

いっぽう、EP3にみられる粗粒部双峰性の分布は、より大きな土器片が含まれていることを示唆する。EP3からは、供献土器と考えられる胴部と口縁の一部を欠いた広口壺の口頸部（091）、把手を欠いた把手付鉢（090）、胴部下半を欠いた甕（086, 089）が出土していることから、これらが選択的に廃棄されたことで粗粒部双峰性の分布を示しているといえよう。また、EP1やDC6にも供献土器がみられ、粗粒部双峰性の分布を示すことが期待されたが、墳丘築造時の掘削で予想以上に細かい破片が多く混ざり、結果的に細粒部双峰性の分布を示したのだろう。

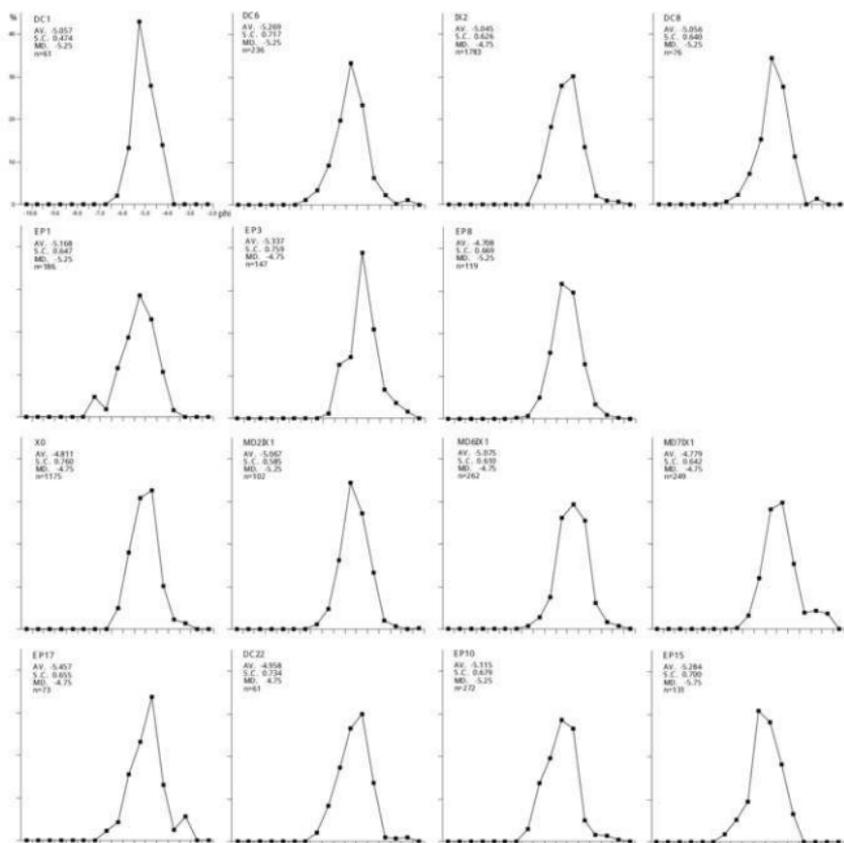


図32 各遺構および層準から出土した土器片の粒径頻度分布。

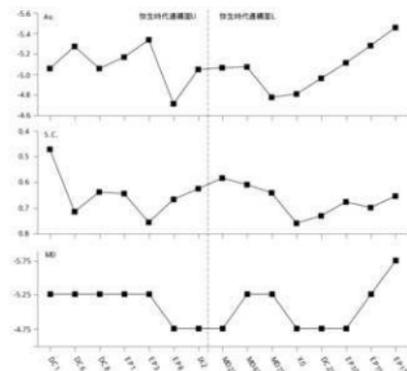


図33 各試料の平均粒径、淘汰度および最頻粒径。

これら供献土器の特徴としては、土器の一部に打ち欠いた痕跡がみられることや、胴部～底部が欠損していることが指摘できる。とくにDC6から出土した広口壺は口頸部のみしか残存せず、それらの一部に打ち欠いた痕跡が認められる(053, 054, 055, 056, 057)。同じ例はEP3出土の091にもみられる。また、DC6出土の058やEP1出土の089、DC24出土の077、EP1出土の078および079は胴部～底部が欠損している。これらのうちDC6の供献土器は、溝の底から浮いた状態で出土していることから(図16, 22, 23)、墳丘に供献されていた土器が後に溝内へ廃棄されたものと考えられる。

なお、図34, 35の092は鹿を線刻した甕もしくは壺の破片で、接合箇所はないが文様の配列や胎土の特徴から同一個体と考えられる。EP3から出土した。二枚貝の復縁による圧痕文が3条配され、その後に圧痕文に沿って鹿の絵が線刻されている。おそらくは鹿の線刻は全周するだろう。壺や甕の胴部上半に貝殻やへら、櫛歯状工具による圧痕文をもつ土器は、とくに山陰および山陽地方の弥生時代III様式からV様式前半ごろの土器にみられる特徴で、おそらくは同地域からの搬入品と考えられる。

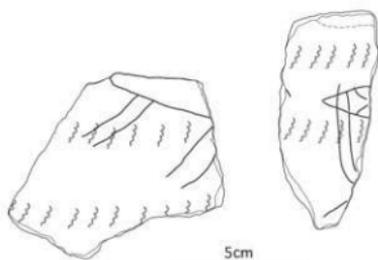


図34 絵画土器(092)実測図

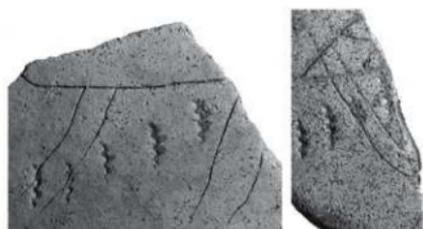


図35 絵画土器の線刻部

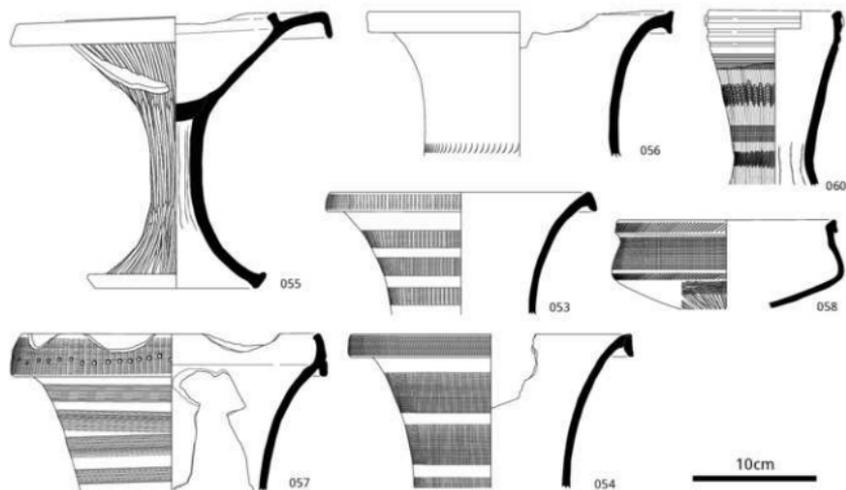


図36 DC6出土土器実測図

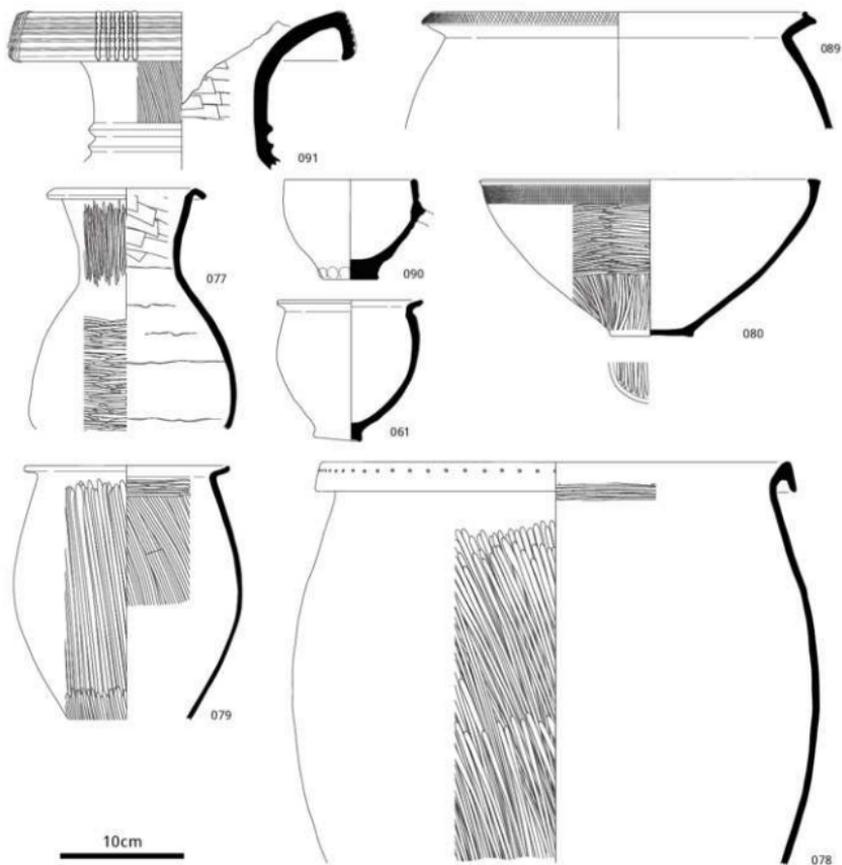


图 37 弥生時代遺構面 U 各遺構出土土器実測図，EP1:078・079・080 / EP3: 089・090・091 / DC24: 077 / DC10: 061

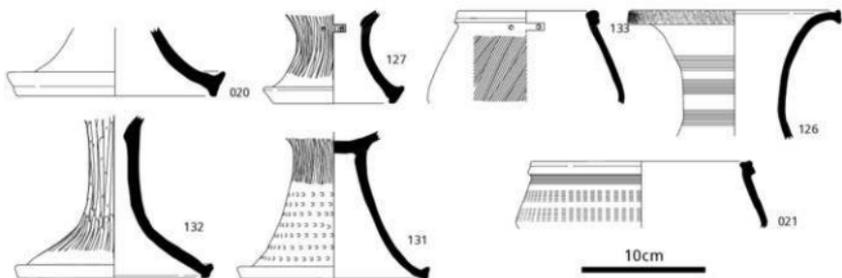


图 38 IX-1 層出土土器実測図。

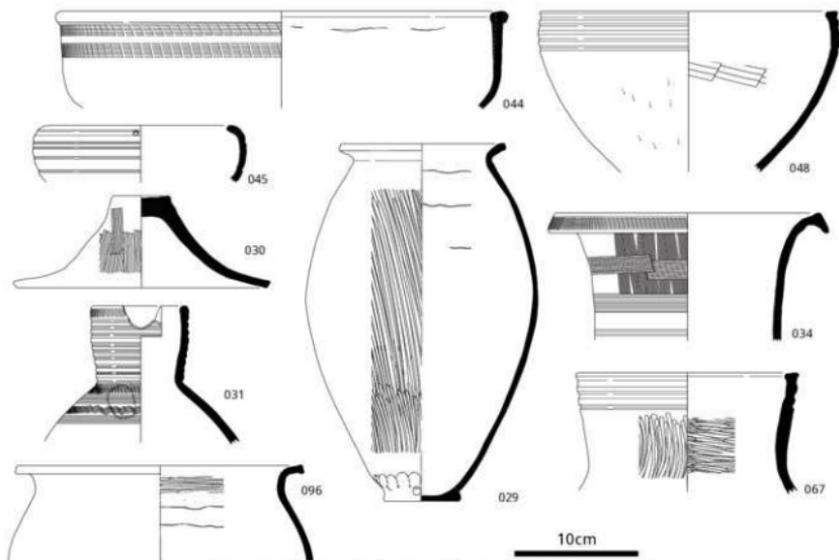


図39 MD7 盛土(096)およびIX-2 層(096 以外)出土土器実測図

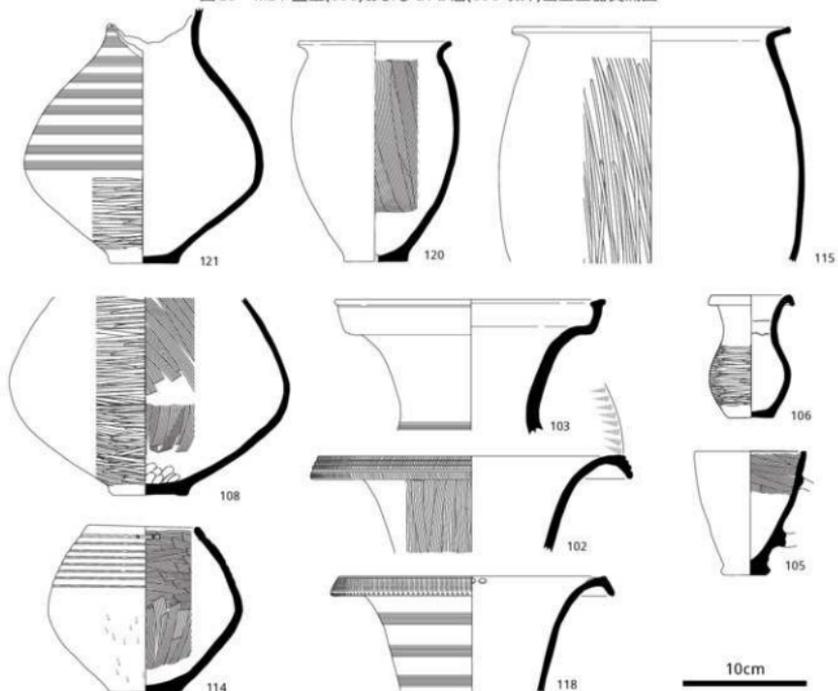


図40 弥生時代遺構面L出土土器実測図・EP10: 102, 103, 105, 106/EP11: 108/EP15: 114, 115/EP17: 118 /EP25: 120/EP29: 121

土製品

いずれの土製品も弥生時代中期畿内第IV様式期に併行する。D01は紡錘車で、直径4.16cm、厚さ最大0.84cm、内径0.68cmを測る。出土地点や層準は不明である。D02は白色を呈する焼土塊で用途はよく判らない。長さ4.68cm、幅4.16cm、厚さ2.08cmを測る。表面には植物による編物の圧痕が残っている。X-0層から出土した。D03は球状の土製品で直径1.45～1.23cmを測る。MD6盛土内から出土した。

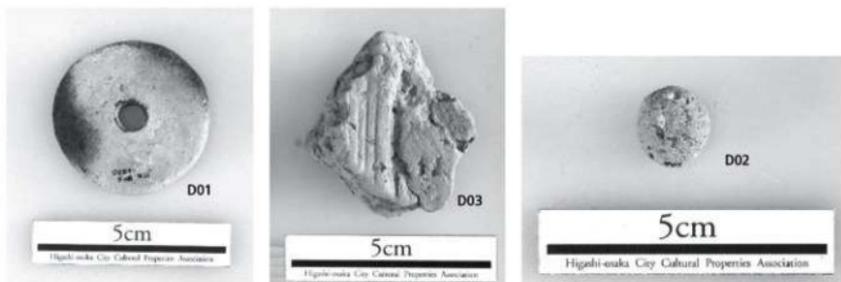


図41 弥生時代IV様式期の土製品。D01：出土地点不明/D02：X-0層/D03：MD6盛土

石器

磨製石器1点と打製石器14点があり、これ以外に剥片が多数出土している、いずれもサヌカイト製のものである。各石器の記載と法量を表1に示す。

表1 石器一覧

番号	地区	出土層準・遺構	併行土器型式	器種	岩石種	長さ	幅	厚さ	重量
S01	A	X-0層	畿内第IV様式前半	石鏃	サヌカイト	5.96	1.83	0.96	8.2
S02	A	X-0層	畿内第IV様式前半	石核	サヌカイト	6.43	5.22	1.80	57.4
S03	A	X-0層	畿内第IV様式前半	石鏃	サヌカイト	6.30	1.39	0.76	3.8
S04	A	X-0層	畿内第IV様式前半	石鏃	サヌカイト	4.12	0.99	0.53	2.2
S05	B	IX-2層	畿内第IV様式前半	石鏃	サヌカイト	4.89	2.47	1.13	12.7
S06	D	IX-2層	畿内第IV様式前半	石鏃	サヌカイト	4.88	1.88	0.48	3.8
S07	G	DC10	畿内第IV様式前半	原礫(素材)	サヌカイト	12.13	6.96	4.12	416.2
S08	E	DC11	畿内第IV様式前半	楕形両面調整尖頭器	サヌカイト	11.09	2.89	1.49	61.5
S09	C	EP3上部	畿内第IV様式前半	刃部片面調整複刃削器	サヌカイト	4.61	3.58	1.02	15.9
S10	G	EP7	畿内第IV様式前半	用途不明磨製石器	サヌカイト	5.89	2.51	0.48	7.4
S11	G	EP10	畿内第IV様式前半	石核	サヌカイト	6.37	4.86	1.68	47.8
S12	G	EP10	畿内第IV様式前半	石核	サヌカイト	8.84	4.27	1.75	60.3
S13	G	EP11A(東壁)	畿内第IV様式前半	剥片	サヌカイト	6.66	4.08	1.35	46.1
S14	G	MD7盛土	畿内第IV様式前半	石核	サヌカイト	8.83	6.86	1.70	95.5
S15	G	MD7盛土	畿内第IV様式前半	楕形両面調整尖頭器	サヌカイト	17.40	3.17	1.31	82.2

※長さ・幅・厚さの単位はcm、重量はg。

木製品

明瞭な加工痕がみられるもの4点があった。いずれも弥生時代中期畿内第IV様式期に併行する。W01はサクラを切り出した丸太材で、直径21cm、長さ51cmを測る。EP3から出土した。両端には石斧で切り出した痕跡が認められる。W02はサクラの樹皮を捲いたもので、幅6.8cmを測る。EP29から出土した。W03は広葉樹を加工した柄付棒で、棒の先端は欠損している。柄部には丁寧な面取が認められる。長さ49.6cmを測る。EP3から出土した。W04はコウヤマキの木棺木口板と考えられ、タテ64.5cm、ヨコ50.6cm、厚さ4.9cmを測る。木の中心より外側を板目で切り取ったもので、石斧で削った痕跡がみられる。DC1Eから出土した。本来は木棺の木口板として利用されるものであるが、何らかの理由で意図的に周溝に廃棄されたのだろう。

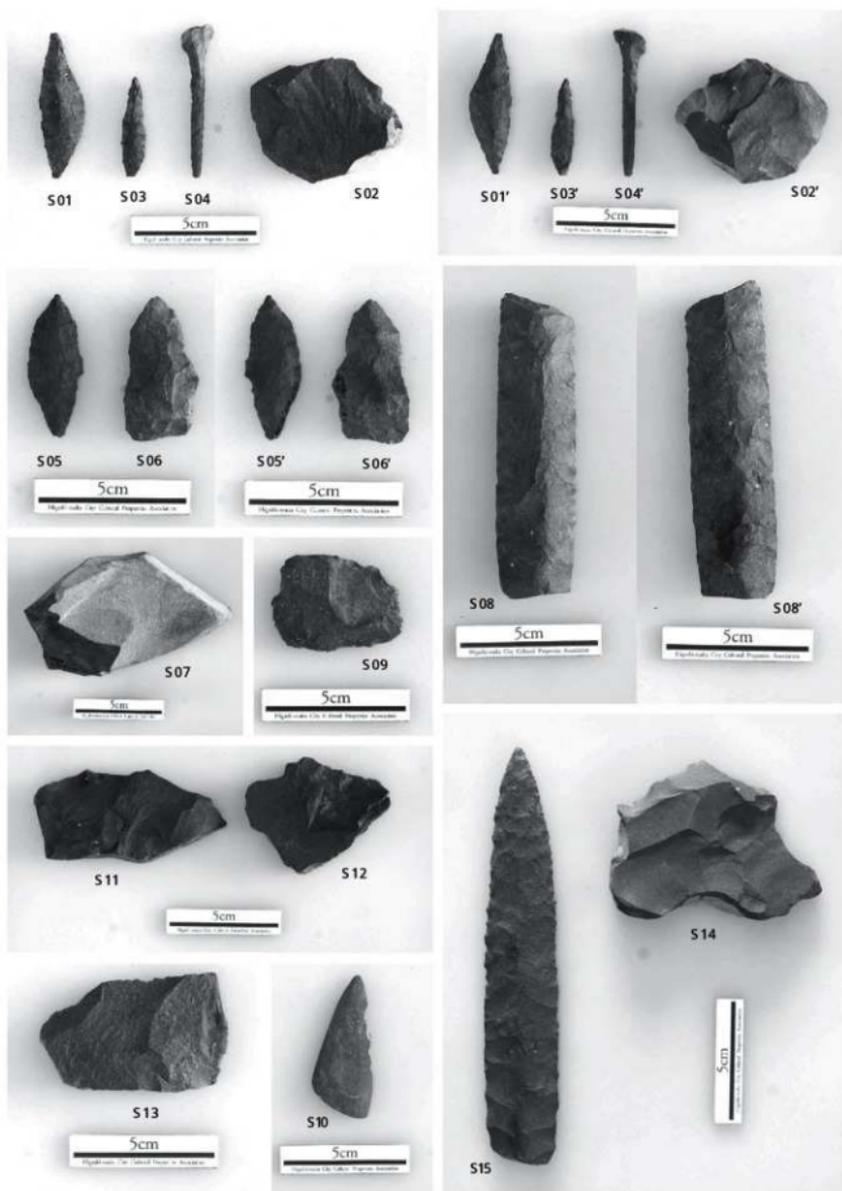


図2 弥生時代IV様式期の打製石器。X-0層：S01 - 04/DX-2層：S05, S06/DC10：S07/DC11
 : S08/EP3：S09/EP7：S10/EP10：S11, S12/EP11：S13/MD7墳丘盛土：S14, S15。



図 43 弥生時代Ⅳ 様式期の木製品 . EP3 :
W01, W03 / EP29 : W02 / DC10E : W04 .

報告書抄録

ふりがな きょうどうじゅうたくけんせつにともなううりゅうどういせきだいごじゅうじ
はくつちょうさほうこくしよ

書 名 共同住宅建設に伴う瓜生堂遺跡第50次発掘調査報告書

副 書 名

巻 次

シリーズ名

シリーズ番号

編者名 別所勇高

編集機関 財団法人東大阪市文化財協会 発行機関 財団法人東大阪市文化財協会

発行年月日 2004.03.31 作成法人ID 42710

郵便番号 577-0843 電話番号 06-6736-0346

住 所 東大阪市荒川3-28-21

ふりがな うりゅうどういせき 遺 跡 名 瓜生堂遺跡

ふりがな ひがしおおさかしゅうりゅうどうさんちやうめ

遺跡所在地 東大阪市瓜生堂3丁目83-35,6,85-5,6

市町村コード 27227 遺跡番号 73

北 緯 34.39.46 東 経 135.35.47 JG02000

調査期間 2002.04.24 - 2002.07.03 調査面積 239㎡

調査原因 共同住宅建設

種 別 集落/墓域

主な時代 弥生

遺跡概要 弥生・漢・ビット方形周溝墓・弥生土器・石器・木製品/

特記事項

共同住宅建設に伴う

瓜生堂遺跡第50次発掘調査報告書

発行年月日 2004年3月31日

発 行 財団法人東大阪市文化財協会
〒577-0843 東大阪市荒川3丁目28-21

印 刷 株式会社ダイニチ
〒553-0003 大阪市福島区福島7丁目17-9

表 紙 OK サンドカラー・ 170kg

本 文 ニューエイジ 57.6kg